

おきく

あらすじ

文／監督・大西暢夫

長い病院生活の中で生まれた夢
一度でいいから沖繩へ

大阪府堺市にある浅香山病院の精神科病棟。何十年と長期入院している患者さんがたくさん暮らしている。そのうちの一人、益田敏子さんが、「生涯のうちに一度でいいから、沖繩へ行ってみよう」という夢を語ったことをきっかけに、有志の看護師たちが、その夢を実現させようと動き出す。他の患者に参加を募ったところ、名乗りを上げたのは4人の男性患者たち。いずれも長期入院の人たちだった。

しかし、最初に言いだしたはずの益田さんが、旅行計画が具体化し始めると「私、やっぱり行かない」と気持ち揺れ動いた。4人のうち3人の男性患者たちは同じ一人の主治医。しかしその主治医からの許可がおりない。なんとか許可してもらえないかと外泊届を出したものの、受理されることはなかった。結局、3人の男性患者たちの沖繩旅行は叶わぬ夢に終わってしまった。精神科では、たかが沖繩旅行、されど沖繩旅行なのである。



益田さんは一時外泊。もう一人の山中信也さんは、この旅行をきっかけに10年の入院生活に終止符を打った。そして3泊4日の沖繩旅行が実現した。浦添市の若竹福祉会で行われ



ている浅香山病院の写真展に招かれ歓迎を受けた。益田さんがよくお母さんと唄った「故郷」をみんなで合唱しようとしたその時、感極まり唄うことができなかった。

扉の向こうとこちら隔てるものは何か

旅は無事に終わり、益田さんは病院に戻り、退院したはずの山中さんは再入院した。病棟での益田さんの表情は明るく、話も弾む。そして山中さんに、大きな転機が訪れる。「彼女の存在は、何よりの薬やな！」目の前に、偶然にも同じ苗字のはるみさんが現れたのだ。それも一つのきっかけとなって、看護師チームが動いた。そして「退院したくない」と言い続けていた山中さんを退院へ導いた。恋人のはるみさんにとって大きな支えとなった。

勤続30年以上の元看護部長だった小川貞子さんが、退職後にNPO法人kokoimaを立ち上げ、精神障がい者の居場所を設立した。この沖繩旅行の火付け役でもあった彼女は、今までやってきた精神科



看護の経験をあらためて振り返った。なぜ、日本には長期入院する患者が多く存在するのだろう。病院と患者のそれぞれの葛藤。受け皿となる地域社会。扉の鍵が開きとうとする開放病棟の夕刻。向こうの垣根に帰っていく患者たち。世間の狭間を行ったり来たり、今日も変わらず穏やかに暮らしている。

監督紹介

おおいのぶお（写真家・映画監督）

1968年岐阜県揖斐郡に暮らす。写真家・映画監督の本橋成一氏に師事。ドキュメンタリー映画「水になった村」「家族の軌跡」を製作し、今回で3本目となる。月刊誌『精神科看護』の取材で、全国の精神科病棟を現在も撮り続けている。精神科特有の長期入院に疑問を抱きながら、患者と寄り添う取材が続く。



◎配給 おめでたい作業所（NPO法人kokoima）
◎問合せ omedetai191@gmail.com
Facebookページ



東京大学駒場Iキャンパス上映会・トークセッション

2020年3月20日（金・祝）12時30分～15時45分

会場：東京大学駒場キャンパス 21 KOMCEE EAST 2 階 K212

登壇者：大西暢夫 監督 小川貞子 NPO法人理事長 kokoimaメンバー

ミア・クルティ カリ・ヴァルタネン（フィンランド・オーブダイアローグトレーナー）ほか

主催：東京大学大学院総合文化研究科・教養学部付属 共生のための国際哲学研究センター（UTCP）上廣共生哲学寄付研究部門

申込み先

入場無料
定員100名



<https://forms.gle/Dm8b4qsQKSZXR6d7>